

中川根ふる里通信

= 第 13 号 =

編集・発行・モアラブ中川根
連絡先
静岡県榛原郡中川根町上長尾990
中川根町役場惣務課
ふる里通信係
郵便振替口座(名古屋)7-81556



久保尾阿弥陀堂 鰐口

町指定有形文化財(工芸品) 年代 嘉吉元年

作者不明、大きさ 直径22cm (1441年)

表面の二重円の中に 中心の厚さ 9cm 重さ2.8kg
周辺の " 5cm

「嘉吉元年12月15日」「奉納鰐口事、遠州榛原郡山杏庄、
久法村阿弥陀堂大施主孫次郎」と記されています。

明治六年に開校以来、百十五年の歴史と伝統を持つ地名小学校が三月二十日にて閉校されました。最盛期には三百人を数えた児童数も五十七人と減少してしまいました。

統合…町村合併当時十一校を教えた小学校の名称は、地名小学校を最後に中川根町から消えてしましました。一抹のさみしさと、あと一人子供を生んで育てておけば…の後悔をして、すでに町のスクールバスで南部小へ子供達は元気に通い始めました。新しい校歌もすぐにおぼえてしまうでしょうね。時々地名小の校歌も歌って下さい。バスの中…

月お茶のかおりにこそわれて、みどりそよ風あまい風

あの友この友呼び合えは、歌声こだまえて

地名のまなびや、つんぐる

地名小学校閉校によせて

平成元年三月二十日、私達の心のよりどころの地名小学校が百十五年の歴史を閉じて廃校となつた。兼て、覚悟とは言ひながら、そこはかと悲しい感傷が胸をよぎる。

平成元年三月二十日、私達の心のよりどころの地名小学校が百十五年の歴史を閉じて廃校となつた。兼て、覚悟とは言ひながら、そこはかと悲しい感傷が胸をよぎる。

あゝ、今日から朝礼のとき流れ来た校歌もない。児童のざわめきも聞かれない。学校の跡は静寂そのものだ。私の人生の門出に当つてのすべての知識を与えてくれた母校、懐しの先生、そして友の顔が脳裏をよぎる。

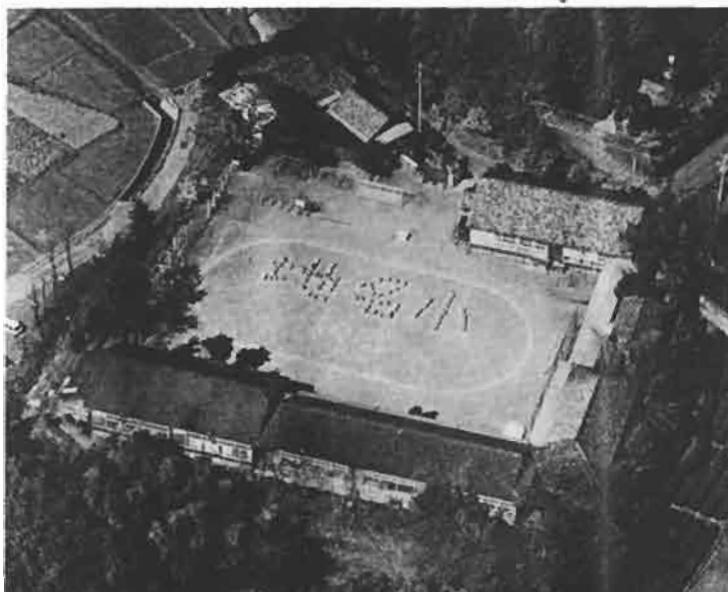
これらのすべてが、これから歴史の流れの中に押し流されて行くとしている。

こうした哀愁を感じるのは、一卒業生として、老境に入つた者の未熟な感情であろうか。願わくば、四月から南部小学校に通学する若鳥達よ、そこから

たくましく羽ばたいて欲しい。

小学校卒業から満州へ、そして兵隊・敗戦・捕虜復員、再出發、定年と、波瀾に満ちた人生を送った一老人とて、この地に地名小学校があつた事を、心に深く刻んで人生の終末点まで持ち続けて行く事でありまへつ。

藤田正義



さようなら

地名小学校

卒業生合計
1525名



地名小学校百十五年の歩み

明治 6

志太郡地名村と下泉村が連合し、第三大学区十六番中学区目一番小学入學舍を設立。下泉に本校を置き、その分校を改名に置く(地名小学校となる)。

第四回学区地名村立小学地名学校となる。德山村立地名尋常小学校となる。十月、現在地名大森東昌寺跡校舎一棟前築移転。費用は全て寄附。

志太郡地名尋常小学校となる。德山村立地名義務教育六年制に伴い校舎増築運動場完成。

大正 13 43 42 41 25 18 14

高等科一二学年を併置し、地名尋常高等小学校となる。

昭和 22 16

学校用施設工事開始。→昭和二年完成。(東海鋼料發電所水器流入土砂利用)校舎建築着工(十五年落成経費一〇九百六三円九三銭)

徳山村立地名小学校と改称。徳山中学校地名分校併設。

地名分校校舎新築により学生移動分離。給水設備完成。

給食室を設備。ミルク給食開始。

町村合併により中川根町立地名小学校と改称。校歌を制定。

町制施行により中川根町立地名小学校と改称。学校給食開始。完全給食となる。

創立百周年記念式典。

学校の木(梅)学校の花(水仙)を選定し植樹。

町議会において「町立学校設置条例の一部改正する条例」を可決。町立学校設置条例中より地名小学校の項を削除。条例施行を昭和六十四年四月一日とする。

三月二十日閉校式挙行。明治の始より百余年続いた地名小学校は、その使命を果してここに閉校し、南部小学校と統合する。

大正十一年三月二十八日の下長尾尋常小学校の卒業生の答辞
は俳句でした。岡本阪雄先生という三十四才の若い校長が、私共
卒業生十八名に俳句を作らせて、卒業答辞としました。
岡本先生は僅か一年で転任されましたが、後に小笠郡比木村の
村長になられました。俳句を初めて教つた卒業生一同は苦心修
たんの末、それでも俳句らしくものが出来たことが不思議でした。

答 辞 濱 江 原 田 耕 作

大正十一年三月せハ日下長尾尋常小学校卒業生

村松寅郎

武原學平

昇嶺今一

樹原利一

原田耕作

春淳

原田耕平

原田耕作

原田耕作

原田耕作

卒業と祝ひて母校をけり
いそげ乞おほしお道は遠くとも
のどりきや桃咲く里にあづま
祝へ祝へ花はほこちひなみにけり
梅笑ひ雪なくや春ひとむ
六年の苦心や花の香も寫し
別れともやめをよめや師の仰恩
すまいで高く空とよひほりかな
仰くあるをろうけり花の香
先生にや恩返しは悲とぞ
咲き散る花にやせりつゆの玄
花もあらえしわう今りう別れ
あなたがやめぐみづつゆに物候く
み花色を養ぬる年と年祝ひかじ
病に左ひだりと別れ花は残りだも
卒業や令と別れにくひはり

原田さん、貴重な思い出をありがとうございます。書写は原田さん直筆。

母校は今 地名中学校



事情により、地名中学校の現在の姿を
写真のみお送りする事になってしまいました。
地名中学校の思い出、話していただけの方
いらっしゃいましたら、お便り下さい。現在
中川根町農林業センターとして活用されています。

新町議会議員紹介

任期満了に伴う町議会議員選挙が2月11日に行なわれました。定員14に対し、16人が立候補し、はげしい薩摩戦となりました。投票率も95%と高く町民の関心の高さを物語っています。新議員も5人で、平均年齢も若帰っています。町民の代表者として、任務を全うしていただきたいと思います。(敬称略)

中原 実 (高郷)
 長嶋 彰 (田野口)
 菅田達夫 (上長尾)
 三倉元志 (地名)
 花村元次 (徳山) 新任
 小林孟司 (ス保尾) ✓
 高村吉弘 (徳山) ✓
 諸田準一 (久野脇) ✓
 滝下郁郎 (藤川)
 滝勝山守正 (藤川)
 鈴木忠夫 (田野口) 新任
 金子 譲 (徳山)
 板谷年純 (水川)

● 当日有権者 5,937人 (男 2,900人)
 女 3,037人

● 議長 板谷年純
 副議長 菅田達夫

平成元年四月初旬
 中川根町議会議長
 板谷年純

空港・牧の原インター・第二東名といったものがあります。みなさん方にとりまして、これらが完成されれば、ふる里はますます近くなつて参ります。たびたびお越し下さい。そうしてできましたら、周りに住んでいる人達に「中川根のお茶はとてもおいしいんだ」と宣伝してやってください。

最後になりましたが、季節の変りめは気温の変化が、とても激しいものです。風邪などひかないようになります。お目にかかる日を楽しみにしながら、ペンを置きます。

敬具

くることは、今。

拝啓 ある里通信ご購読者のみなさん、こんちは。今こちらは、桜の花も盛りを過ぎ、霜がぶりをぬいたお茶の芽が、こわごわと、顔をのぞかせたりして、辺りはもう、すっかり、春のたたずまいです。その後、みなさんお変わりなく、お退してしまった。そもそも迎える新緑の季節にお出掛けいただけるのを、心待ちにしていますが、この便利を書いております。

さて、読者のみなさん、ここ中川根町では、この春、特筆すべき三つの出来事がありました。まず、二月には、町議会議員の選挙があり、十四名中、五名の新議員が当選し、只今、活躍中です。尾呂久保に、ハウスおろくぼと言ふ名前の三十二人が泊まれる宿泊施設が完成しました。ふる里の静かな夜と星眺めながら、御家族で過ごす。ちよつと、オツなものかも知れません。時期は旧暦の七夕あたりがよろしいかと思います。そして、もう一つは、地名小学校が、下長尾にある南部小学校に統合されたことです。地名の人達にヒツでは、とても淋しい事に違ひありませんが、時の流れはいかんとも難いことです。これで、中川根と徳山が合併した頃、十一校(分校二校含む)あつた小学校も、三校になりました。複式解消の為にはやむを得ない事ですが、

淋しい気が、致します。
 三十年ほど以前のことになりますが、その頃の中川根町は、世帯数二〇八九世帯、人口一一・四三九人が暮らしておりました。暮らすときは、あまり豊かではありませんでしたが、まわりがみんな貧しかつた、将来に夢をつなぎながら、お互にがよりそつて暮らしていました。そんな時代でした。それが、平成元年三月を見て参りますと、世帯数一九八〇と一〇九世帯が減少し、人口では七・五一人・三八六八人減と、およそ一年間に一二九人づつ減ってしまったことになります。今は少し、減少率は下がって参りましたが、昔って高齢化が、大きくなつてきています。

購読者のみなさん、今ふる里中川根は、平均年齢の高齢化、林業や茶業といった地場産業の低迷、若者の流失と三重苦にあえいでおります。けれど、泣きことはかりはつておられません。みなさん方のふる里をどう蘇生させていくか、みんなが、それの場で懸命に努力している、そんな姿が伺えます。みなさん方のふる里は、これ以上よくなることはあっても、決して悪くはない。と私は確信しております。高度成長の終焉は、山村地域の見なおしに必ずつながつて参ります。多くはないにしても、大井川に水が戻った事や、ふる里創生資金の交付などは、そのあらわれといえましょう。

今、国が計画しているプロジェクトの中に、島田・椿原・みなし方にとりまして、これらが完成されれば、ふる里はますます近くなつて参ります。たびたびお越し下さい。そうしてできましたら、周りに住んでいる人達に「中川根のお茶はとてもおいしいんだ」と宣伝してやってください。

最後になりましたが、季節の変りめは気温の変化が、とても激しいものです。風邪などひかないようになります。お目にかかる日を楽しみにしながら、ペンを置きます。

大井川水問題決着

三十年に一度の水利権更新期をむかえた大井川水系四発電所をめぐり、川根三町の住民は、町長を先頭に「大井川に水を」の願いをこめてこの二年余、一致団結して頑張ってきました。地元中川根に關係のある久野脇川口発電所の水利更がついに更新されました。

久野脇川口発電所水利権更新申請

中部電力は、二月末、建設省に、大井川の久野脇川口発電所の水利権を申請していました。内容は、川根三町の地元が強く要望してきた塙郷えん堤の通年維持流量毎秒五十七を、昨年三月末の協定書どおり三七に括り置く。

知事、更新に同意、建設大臣は承認

齊藤知事は、三月三十一日（申請期限）右内容の水利権更新に同意し、建設大臣も承認した。地元の住民の「昔のような水豊かな大井川の流れは望めなくとも、渇水期こそ五七の流れは必要」、「三十年の水利権は、あまりに長すぎる、実情に合わせて十年だ」、「二度と浸水被害を受けさせないで」と核にした中電や建設省に陳上を重ね、住民運動で意を表わしたのに、何故? 「ああ、やはりダメだったの感があった。この一ヶ月間、内容の見直しを迫る県と中電の間で連日激しい議論を重ねた結果の土砂対策や浸水対策に関する中電としても努力する。(2) 流量問題も今後検討する」との前向きな回答があり、同意したとしている。又、県は同日付で建設省河川局長に対し水利権の十年への短縮を求める要望書を提出したという。

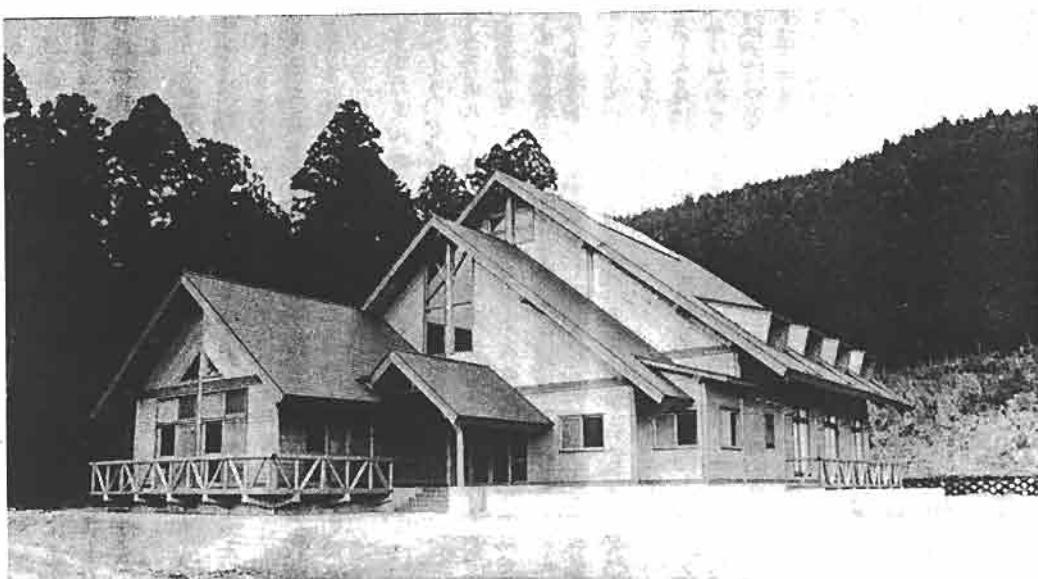
県と中電、大井川の水問題で合意

四月二十四日、大井川の放流上乗せなど具体的な協議を進めていた県と中部電力は、(1)昨年四月から実施している塙郷えん堤からの放流上乗せ期間を二ヶ月余り延長する。(2)三十年の水利権更新期間とは別に状況に応じて県と中電の間で流れ改善について協議するなどの点で最終的な合意に達し、覚書に調印した。

内容は、塙郷えん堤から毎秒五十七（渇水期三七）大井川ダム・寸又川ダムから合計三七（渇水期二・二七）の上乗せ放流をし、期間も昨年の四月一日から九月三十日までを三月二十日から十二月五日まで延長する。また新たに大間川えん堤から通年口・ロ六十七、榛原川えん堤から通年口・ロ七十九から対応する予定（例、川床にたい積している土砂の堆積や堤防の強化など）を希望していた塙郷えん堤の通年五十七、大井川・寸又川両ダムより通年三七以上の放流が通年ではなく期間延長になった事について、県では「川口発電所下流には、工業用水や発電用に使っている東海バルブや上水として使用している島田市などの既得水利権者があり、これと考慮すると通年五十七などは難い」としています。

この二年余、ふる里は、大井川に水を、に燃えました。久野脇前の広い河原に水が流れました。南アルプスに源を発した貴重な水流は、太平洋に途切れることなく流れます。地元の意を汲んで下さった知事さんありがとうございました。リーダーの町長さん本当に御苦労様でした。

完成した
中川根
ウッドハウスおろくぼ



鈴木省三さん逝く

新学期が始まって間もなく、子供から「鈴木省三さんが亡くなられたよ」との悲しい知らせが届きました。教育委員会に問い合わせてみますと、「一月二日」でした。鈴木さんは昭和三十一年代から中川根町内の小・中学校へ、たくさんの書籍を贈って下さっています。その総数は千冊を越える事と想像します。

鈴木さんは元来身心共に丈夫で病氣に縁の無かった人だと聞きます。昨年十二月軽んで頭を打って入院されましたが、すぐ快方に向かい、年末には退院お正月も自宅です。それ時に出社されていました。そうですが、お腹の調子が悪くなり再入院されましたが、すぐ快方に回りました。享年八十四歳、病名は直腸癌との事でした。



四月六日集英社葬の告別式には、中川根町を代表として、教育長が列席致しました。鈴木さんは長年出版関係ひとすじの道をたどられ、その人柄と功績をたたえ、お別れに参集した人は後を絶ちませんでしたと言われます。又中川根中、中央小の生徒、代表が御遺族にお礼の文をお贈りし、長年に鈴木さんとお別れとしました。

御冥福をお祈り申し上げます

ふる里を愛し支援して下さった鈴木さん。昭和三十七年に中川根町へ寄稿して下さいました。ふる里への言葉を今一度お届け致します。

移り変りゆく世相 茶産業の転機を思う

私は懐しい郷土の村塾要覽と広報を拝読して素晴らしい发展の姿を見、目がくらが潤む思いで胸はいっぱいである。それにつけても、今を去る四十数年前、今の協同組合田野口支所のところに、徳山小学校第一分校場があった。腰高の板壁に障子のはまつたお粗末な建物であった。『茶部屋かと思つたら、これでも学校だ』えと侮蔑のこもつた言葉を投げていく様のりのうろ姿を見て憶りを覚えた。私が今でも脳に浮んでくる。その頃を思う時、わが郷土の今の發展ぶりは夢にも考えられない景観である。

翻つて、都會生活を見つめる時、世纪の敗戦後は、科学に藝術に、經濟にして現実の生活に一ハロ度の大転換を遂げた。とくに敗戦による若い人の生活意識は連合軍の進駐に影響されて、極端に歐米化し、衣食住における変貌ぶりは、われわれ戦前派の人間には到底想像できぬ變り方である。

われわれが仕事の關係で、文芸家、画家、大学教授等の第一線で活躍するインテリ階級の家庭を訪問してもコーヒー、紅茶に洋菓子の接待は受けるが、ヒロリヒした香り高い緑茶の御馳走はあすかることは滅多にない。また東京全郡の至るところに前記の類を商う喫茶店は無数にあるが、緑茶や和菓子を商う店は絶無といつても過言ではない。

われわれが仕事の關係で、文芸家、画家、大学教授等の第一線で活躍するインテリ階級の家庭を訪問してもコーヒー、紅茶に洋菓子の接待は受けるが、ヒロリヒした香り高い緑茶の御馳走はあすかることは滅多にない。また東京全郡の至るところに前記の類を商う喫茶店は無数にあるが、緑茶や和菓子を商う店は絶無といつても過言ではないのが現実の姿である。

七まと話が飛躍するが、キャラメルの元祖森永王国も、戦後進出したかムのロッテと最近粉末ジュースで売り出された渡辺製菓の二大新銘に牙城はゆるが、これ、年々キャラメルの売れゆきは減少していくのが眞実の姿である。さすがの森永製菓もかムや粉末ジュースの製造に踏みきつてこれに応戦している。これが製菓メーカー業界の現況である。また、わが日本の伝統を誇る芳醇なる清酒は、今やウイスキー、ビール等の洋酒系統に一年一年と歳を重ねることにシリシリと押しまくられて、清酒醸造業も斜陽産業の一つに数えられるに至った。

私はあれを思い、これを考える時、わが郷土の製茶事業も、いまや大きな転機に曲り角にきていく。すなわち緑茶専門ではなく、時代の流れに沿つて、紅茶製造に踏み切る段階に至つているのではないかと思う。日本の茶製茶産業はようやく文化水準の低い東南アジアのリップトン紅茶の輸入阻止に立ちあがるべきである。茶園に恵まれたわが郷土も卒先して紅茶製造と販売の研究に力を尽してあたるべきである。この研究所には人材を集め、村費をつぎこみ、リップトン紅茶に優る最良紅茶製造に努力すべきである。国内需要は勿論のこと、海外に輸出して外貨獲得の一翼を担うべきであると田心われる。

門外漢のわたことを述べて汗顏の至りである。賢明なる郷土先輩諸君の他山の石となれば幸である。

鈴木省三氏略歴

明治三十七年田野口に生れる。藤川小学校卒業後株式会社三省堂に入社。後株式会社小学館に転社、同社出版部長を長年勤められ、昭和三十七年小学館の姉妹会社、株式会社集英社に転社、同社副社長を務められ、現在は同社顧問職でありました。

わが父を語る 3. 活動時代

郷土の偉人高木士太郎博士

明治三十一年秋帰朝した父は約十日間の休暇をとった後家族と共に上京し、直ちにその志に基く大車輪の活動を開始して社会奉仕の生活を始めた。

まず東京築地教会の牧師、次で本郷中央会堂と駒込教会の兼任牧師、次に麻布教会の牧師として説教し、信徒特に数多の青年をキリスト教に引き入れた。当時帝国大学、第一高等学校その他の学生が道を聴き、教えを受けるために是等の教会に盛んに出入りし、或は家に訪れるもの甚だ多く、植村正久、海老名弾正、内村鑑三の如き当時の第一流の思想家、宗教人と肩を並べて是等青年男女の宗教教育に力を尽した。

一方同時に母校の東洋英和学校教授として神学を講じ、又他方、明治三十四年以後日本メソジスト三派合同の機關雑誌『護教週刊誌』の主筆に任じて連綿大正二年に至る十二年間に亘って健筆をふるい、強力な筆陣を構え、キリスト教の立場に立つて忌憚なく社会批評、人生觀、宗教論を明快、鋭利な文章を以て展開し、当時のキリスト教会に於ける光彩ある代表者として世に認められる所となつた。

明治三十七年には前記の他に青山学院神学部教授とも兼任して新約聖書神学を講義し、牧師の養成に関与することとなり、東洋英和学校は辞任した。この頃、ヒクトリア大学教授会議では父の活動の実際と、学力とが極めて優秀であるのを認め、博士号を贈ることを内定し、同大学長が来日して父にこの旨を告げ、渡米をすすめた。そこでまた、明治三十九年八月カナダのモントリオールで開かれたメソジスト教会世界総会に出席の機に特に招かれて、母校ヒクトリア大学を訪い、神学博士（ドクトル・オブ・ディニシー）を受けられた。このようにして日本人としては最初のことであり、大いに日本人の面目を施した次第であつた。

右の総会終了後、父の希望した世界漫遊が許され旅費等

の支弁を大学より受け、約半歳に亘り米、英、仏、伊、エジプト、ユダヤ等を巡遊して先進国に於けるキリスト教の実際を見聞し、或は聖キリストの古之の地を訪れて当時の文化と現代の様相とを比較し、國民に眞の宗教心の有無がいかに國家興廢に關係あるかを悟つたのであつた。

翌四十年春地球を一周して帰朝するや直ちに青山学院神学部専任教員となり、間もなく牧師の職を離れて主として新約聖書神学と比較宗教学を講じ、神学生養成に努めた。

牧師時代より父は寸暇を割き著述にも力をこめ、宗教小品、基督教安心論、ウニスレイ伝、基督教とは何ぞや、生活と宗教、新約全書解題等のかなり大部の書を著わしだが、特に明治四十二年夏からは殆ど全く個人単独の努力を傾けて當々五カ年に亘り基督教大辞典の編纂を成し遂げた。大正三年にその発行となるや、疲労のためか翌年脳溢血に冒されたが、幸にして年余平常の健康に復することができた。大正二年三月青山学院理事会は父を同院院長に推した。ここに於て父は、健全なる宗教的の私立学校こそ真に力強く頼もしい青年を養成すべき教育機關であるから、この際まだ比較的弱体の青山学院を大いに改革拡張して、大学にまで昇格させねばならぬことを主唱し、理事会はこの主張を受け入れて大いに父を後援賛成した。ます学院内部体制の改革を遂げ、次で高等学部に人文、実業の二課を設け、宗教と対社会との接觸を緊密にしようと画り、また不燃校舎を新增築し、学内整備を着々とすすめ、次でいよいよ青山学院大学の構想の実現に銳意努力し始めた。然し不幸にも大正十年一月二日腸チフスを患い、築地の和田病院に入院治療したが力尽き、計画の実現を見ることが得ず、一月二十七日早朝五十八才で遂に倒れ、二十三年間に亘る社会活動は終つた。父の痛恨誠に察するに余りあるものがある。学院も教界内外も大なる損失として哀悼した。然し父の意志は引継がれ、学院は拡張と向上の一途をたどり遂に青山学院大学の名と対を有するに至り、現在東京における有名校に成長し、幼学年より大学に亘る男女学生の各種科を備える教育及び研究機關として特色ある性格を發揮している。

父の墓は東京上野の谷中墓地にある。へ次ページへ続く。◆

4. 性格と生活

著者の高木二郎氏
昭和37年ごろ



父は極めて謹厳であると同時に明朗で愛情に富み人に信用され信頼されたので内外各方面に亘る友人知己はすい分多かった。彼等も父を慕い敬愛し訪客の応接に暇なき趣があった。然しが優しい心の裏に脊骨の強きものあり、公明正大で不正を憎むこと甚しく誤ったもの、いいかげんなものは断じて受けなかった。この性格は一部の人々からはずい分嫌われ煙たがられた。

この性格は幼少時から一貫していたらしく二十代の青年の頃最初は政界に雄飛しようとしたが、当時の社会人特に政界人の不信不徳などにあきたらず一転教育界、函館宗義界に入る原因になったものと思われる。誤ったものは繊細のことでも許さないといつてこの性質はいろいろの面でいろいろの行動として現われていたが、例えは人に書写させた原稿にある誤字脱字の類に神経を尖らせたり、言葉の使い方に極めて慎重であり、そこに偽りのないことを自ら認め、人にもこれと要求した。従って行動は正確で、時間や時刻を厳守し、約束を守り、まことに自他共に許さず。いよいよけんの口先の弁解を強く排斥した。家庭内でも虚偽は最も厳しく戒められた。父は自らもこの厳しい性格の不利多きことを覚つていて、私などが余りに馬鹿正直にやかましく虚偽を責めると苦笑して、「水清ければ魚住まず」という説があるよ」と暗に世間にについて訓えることがあった。

父は頭脳明晰で記憶力優れ、体系的論理的思考に得意であった。また知識欲甚だ旺盛で、少年時代から晩年に至る間、その読破した図書の種類と範囲と数量とは莫大なものであった。特に驚くことは、漢書はあらゆるものに通じ、英独語の他仏語、ラテン語、ペライ語を解し、夫々の国語で専門原書は勿論のこと、詩劇、小説、歴史等まで読んでいた。新聞は常時三種を、雑誌は週月季刊等十数種、学術上、一般的に亘り和洋のものを購読し或いは寄贈を受けていた。読書の速さが非常に速く、また何時も何かの図書を手に持たぬことはなく、便所内でも読書するという努力ぶりであった。父の死後図書等の整理に当り、外の図書総数六千余部、雑誌類はその数を知らず、その処置に当惑したが、大部分を青山学院に寄贈し、

学院はこれを図書館施設の基礎とした。先見の明があり進取的であった父にとって、この莫大な内外図書の詰めは、父の積極性に一層の拍車をかけたに相違ない。

趣味としては読書の他に時に和漢の作詩に打ち込んでいたが、四十五六才の頃から晩年に至るまでの間は、私の母や私と伴ってよく劇場や寄席に行き、クラシカルな劇や義太夫の語りものに覗入り聞きしたり、又当時の新しい新劇にも興じた。このことは唯興味本意が目的ではなく、むしろそこに再現された人情風俗の演出から人情の神秘をつかみ、人間の性情の研究をしてから、藝術を通して人生の究極の幸福とか不幸とかは何者であるか、人間の悩みや喜びは何處にあるのか等を感じとり、社会道德の伝統や倫理実践の変遷を考えて現代の社会はいかなる倫理、道徳のもとに律せられてゆかねばならぬかを考察するのが真の目的であった。要するに藝術を通して体得したことと教育上、宗教上、應用し取り入れて効果あらしめようとしたのであった。しかし、それでも私は芝居や寄席で父が母と共に悲しい場面で涙を流したり泣くのを一生懸命にこらえていたのを、私も泣きながら温見したことを覚えている。

又元来音痴であった父は、外國に於ける音樂の演奏効果について考へる所があつたと思われるが、帰朝後、教堂を或いは学院の講堂を提供して、當時一流と謂われた和洋の樂人を民間から或いは上野の音樂学校から招き、又は海軍軍樂隊や陸軍戸山学校のオーケストラやバンドを導入して、一般に公開し、演奏させ非常にその方面の興味を振起せしめたものだった。

父は私物と公物とを厳しく区別して公物の私用を断固戒めた。例えば学校備え付けの純一枚、封筒一つ、ハガキ一枚といえども公私混用を自己に許さなかったばかりでなく、これを貰てする人を憎み決して信頼しなかつた。これは父の根強い公正な観念から由来する所であるが、いわゆる汚職の罪は右の小さな罪悪から成育するものであると説いていた。

父は他人に迷惑をかけることをできる限り自ら注意して避け、己の欲せざることと人に行なうことなれど、との東洋的訓戒と己が欲する所を人にも施せ、とのキリストの訓えと自身を以て守り且実行し、自立独立の精神と人類愛とに基礎を置く民主的個人主義に徹していった。從つて極めて民主的で、常に他人の立場に立つて言動し、自分のみを主體とする利己主義を排撃した。このことは家庭内外でも行われ、主權を主張せず、どのような人に対しても威張ることはなかった。人に不快感を与えたかった。困難に直面する人に手を差し伸べて、かなり多くの人と困難から救つたり世話をすることを喜んだ。

。 。 。 (四)

父のこのような性格は自然金銭欲や物欲から縁遠いものとなり、従つて日常の物質生活は貧乏そのものであった。それでもこれを嘆くことなく心内は暖かく朗らかで清廉を樂んでいた。しかし、その貧乏生活を我々子供はいやと、いう程味わされたものである。父はこのような生活のうちにあつて決して借金せず、与えられた収入を越えて支出することなく、その貧困を尊いものとして満足していた。いやその上に乞食に専み孤兒院に寄付し、時に路傍でたまこれて懷中の金を大半奪み与えるとの遊びも行なうとして母に笑われさえした。牧師の給与、教授の月給は當時実に低額で現在のニコヨンに毛の生えた位のものしかなかった。機関紙「護教」を編集したり、著述をしたり、或は講演したりして、すい分無理な努力をしながらアルバイトを続けなければならなかつたのである。要するに終生を宗教人、教育家としての純潔と廉潔とに徹したのであった。

父は明治十九年三月二十九日、二十三才で結婚した。静岡市に於てである。母は檜原郡川崎町（現檜原町）静波の大石五郎平の長女梨花（翌年長女が生れたが間もなく死亡した。同二十一年十一月長男一三、同二十五年九月二男二郎、同二十七年十一月三男武夫が出生した。父は私共兄弟に是非共高等教育を施したいと念願し、すい分無理をして私共の欲するコースを快よく進ませてくれた。一三は当時の帝國大学農科を卒業し、まもなく外國留学をして農学博士の学位を受けた。武夫は早稲田大学を経てこれを留学し、バッテラーオブアーツ（英國大学士号）の学位を得た。しかし二人は共に数年前に亡くなつて私独り不肖の身を徒らに老いさせている。

思えば家庭に於ける父のしつけは、誠に嚴格であり、母の之に対する援助も手きびしいものがあつた。然し愛情誠に溢るるものあり、すべてが公平無私平等であつたし、不當に親権を振りまわして物事を無理押しつけすることはなかつたから、私達子供もこのよう父を敬愛し、その腕の内にかこまれて、誠に平和な和氣藹々たる家庭に育つことができたのである。在り一日の父を回想することに、感謝の念と共に、胸温まる幸福と誇りとも感るのである。（おわり）

わが父を語る 高木二郎 著より



88 二号に渡る長文でしたのががだつたでしょ。

この様な立派な方が 中川根出身だった事を本当にほこりに思ひます。次回号には久野脳出身の諸井慶五郎氏をおとどけしたいと思ひます。

余録

88 我が中川根で高木士太郎博士の事を知つてゐる人がこれだけ居るのはどうか。実は私も近年まで神学博士であると言う事しか存じなかつた。またま町史研究会の屋号調査で高郷にカジ屋敷と称する小字名があり、高木源左衛門（舊名）という名主が大きな屋敷をかまえていた事が判つた。長男の士太郎氏が家督を継がなかつたため一家は離郷しますが明治三十年代まで屋敷があつたと言うことです。

88 現在士太郎氏が生まれた場所には、小沢渉先生が内科医院をなさつて地域の人々の健康を守つていらっしゃいますが、先代この地に開業された佑先生は士太郎氏の弟にあたる方でした。

88 高木系図によりますと父の源左衛門氏は二男で高木家を継ぎ、長男又左衛門氏は八木家の養子となり初代中川根村長となつた人です。士太郎氏には一人（男子九人、女子二人）の兄弟があり、二男不三郎氏（判事）、三男愛助氏（檜原町高不病院）、四男英作氏（大下姓中川根村長）、七男佑氏（小浜姓）その他皆様は存知上げませんが中川根の為、檜原郡の為に尽力された方々です。すでに来世へ旅立たれています。

高郷の共同墓地に源左衛門氏木三郎氏、良平氏（五男）の墓標が立たれています。

88 明治三十年代士太郎氏が内村鑑三氏をともない上長尾へ來たと言つことは、当時は大変な出来事であります。又ハボ又左衛門氏の紹介で、上長尾の酒井倉次郎氏、高畠喜三郎氏が内村鑑三のもとで、クリスチヤンだたと言つてです。

88 中央小学校の歴史資料室に高木士太郎氏の高等小学校時代の書がありました。細く美しい字でした。

88 著者の高木二郎氏は太平洋戦争終戦後ふる里の中川根へ帰つていらっしゃつて昭和四十一年頃まで高郷に住んでいらっしゃいました。東京大学理論物理学部優等首席の輝やかい経歴の持ち主、又海軍軍人さんにつつても、かわらず、平和を愛する心のやさしい方でした。私の実家に高木氏が描いた絵があります。香港とビキニ環礁の絵です。幼なつた私をひさの上にのせて、絵の説明をしてくださつた後、太平洋戦争は日本が悪かつたんだよ。とおっしゃつた言葉が心に残つております。又医学に見はなされた息子さんを救つたメシア教を信じ、死後は医学の為の献体を約束する白菊会にも入つておられました。高郷での生活は、不自由な事も多かつたと思ひますが、その様な中、わが父を語る、を残して下さつた事を感謝したいと思ひます。



これが一本 横

樹今700年以上、下20mの所に
觀音堂(千手)屋敷跡があります。

旧中川根方面の交通は近世まで、大井川を下るルートではなく、春野方面と出発なつばかりがありまーた。春野は森から掛川、浜松方面へ通する道や、長野県方面へ行く道、愛知県北部に通する道などの接点となっていました。上長尾遺跡に見られる黒耀石は、趣訪地区にしか取れないものですし、下伊那郡大鹿村には、智満寺の末寺香松寺もあります。春野を通って行ったものと想像でこります。

春野町は、おとなりの町なのに郡も地区（西部）も、経済圏もちがい、行政交流は絶無に等しいのですが、ひと山こえて中川根へお嫁さんが沢山来てくれますし、又嫁いで行きます。まして壯圖時代北遠は、山香庄として同地域でした。やがて中川根が檜原郡に編入されても、犬居城の天野氏の支配下で東の守りであったかもしれません。又春野町の北西に水窪町があります。水窪町に上長尾地区と同じ地名がいくつもある事に驚きますが、何かの共通点が、かくされてるのでないか？と考えたりします。

街道 今昔 春さかり

昨年は武田信玄ブームでした。中川根にも武田武士の末裔では、といわれる家・地区もあり、「こよいはこれまで」と信玄の頭髪には、いささか閉口でしたが、興味深く、テレビを見ました。静岡県と長野県は、南アルプスにさえ切れ近くで遠いおとなりですが、昔はずっと身近でした。相良あたりから趣訪まで西の塙の道(街道)が繞き、遠州人は、信州街道と呼び、信州人は秋葉街と呼んでいました。山岳部はやはりほつに道があり、この街道、武田の大軍が二度通りました。

元龜三年(一五七三)秋、信玄は四万余の軍を率いて京にのぼるべく、信州街道を遠州に入つて來た。以後半年、遠州地方は戦場と化し、沢山の民百姓、兵士が死んだと言われます。死者の魂を鎮める為にとねえたお絆が、遠州大念仏のはじまりと言われます。

天正三年(一五七五)春、勝頼が二万五千の兵を率いてこれ又京へのぼるべく、青崩峠をこえて入つて來た。(後長篠の戦いで沈す)それより少し前、信玄が駿河の今川氏真を攻め、氏真は駿府城を捨てて掛川城へにげる……逃避行ルートが意外や中川根を通っていた事が判つて来ました。

永禄十一年(一五六八)十二月、今川氏真は家臣三浦右衛門佐の先導にて安倍城、徳山城を経、(大泉院でも休む)大井川を渡り、白羽山に登り(尾呂ス保部落に馬を与え)……その後は長野・松尾山から一本桿、又は尾辻を通り、後はさだかではありませんが、郡境の山道をひた走りに掛川城へ落ちのびたりでは、と想像します。新道により廢道になつたり、山に帰つた昔の街道もたずねて見ると、新芽一束、春日爛漫といったところです。

(中川根の意)

標方面道尾保久右左

短歌 コーナー

高未庵山房

卷之三

- 泣ぐみ心昂ぶるたまゆらは
草に寝ねつつ 空え書く文字。
 - 基督も私迦も善く人の子と
なりて遊べる春の夜の夢。
 - たらちねの母者が爲し善行を
今に教ふる おもかげ恋ほし。
 - 誰しもが思ふなき事吾はまた
草にい寝つつ 大空へ書く。
 - たらちねの母が愛なしをひと抜け
恵みの心 恋ほしかりけれ。
 - 窓乏のひと江恵みー たらちねの
母者をいまに偲びけるかな。
 - 空江大きく幻の文字を書いてみる
俺の名俺のこのペンネーム。

画家であり、歌人であられます。高丘葉さんは、下長尾出身で、現在浜松市にお住まいになつていられます。



高郷大井川堤防の 桜並木

昭和30年ごろ植えられました。見事に花をつけます。昭和40年の台風の時、桜の幹が大井川の浸入を防いでくれました。

但つております。久しうに
テニス病ものをかれ生
き返りました。来春は桜
の花も皆様のいらっしゃる
のをお待ちしております。

花と言えば桜、ここもふる里に美しい桜の花が咲きました。暖冬と予想を上まわる降雨量に木々の芽が春が来たことを感じ、我先にと新芽が萌えました。特に柳、梅、桜や芽が早く開花はいつになく早かったです。桜の花は度々変わった天候にとまどつてか、意外と開花がおくれました。しかし自然と人の手を加えたものの違いでしょうか、山桜の開花は三月中旬と早く満開になるまで、箱木の新芽とが重なり合いました。ふる里の山々は淡い色彩の衣をまとい、紅葉にもひけおちぬ美しさでした。山桜の芽もとてもきれい。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

13号は1部 〒共100円

14号からは1部 〒共150円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。誠に恐縮ですが、夏の号より代金が変わります。一層の紙面充実にむけたいと思います。

今回で購読期間の切れる方に郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、御購読をお願いします。来年の夏の号まで600円をおすすめします。購読期間が切れて半年以上御送金が無い場合は勝手ながら中止とさせていただきます。必ず住所変更のおりも葉書等でご連絡をお願いします。

お問い合わせ先 TEL 0547(56)0015

川 汗 頭 子

お払込通知票

口座番号
加入者名

名古屋(7)-81556

モアラブ中川根
ふる里通信係宛

ふる里通信の経過とお願い
昭和六十一年四月三十日創刊されました「中川根ふる里通信」も早四年目の春になりました。当時町出身町に關係のある皆様とふる里の群衆と約千人の住所氏名を町民の皆様にご紹介して、ただで返信の期待を込めて創刊号をお送り致しました。そして初回号で約二三〇人の方々が会員になって下さいました。

その後は、三号より一回発行することに町より遠くはなれた所にお住まいの皆様より再度五六十人ほどの会員を募りました。その内約二〇%の方が会員になって下さります。現在七〇部発行、六五〇人ほどの会員に増え、本当にうれしく思います。もう少しして当初紹介された方々への二回目の歓喜も終ります。一心一意で一段落とも思いますが、干部発行までこきつけたことも思ひ考えがゆれます。中川根をふる里と思つていらっしゃる方はまだまだ沢山いると思います。皆様のお知り合いの方でまだ「中川根ふる里通信」が届いていない方がありますから是非ご紹介下さい。さそくお送りしたいと思います。

若葉・青葉の新茶の季節、久野脇では二十日ころから摘み始めています。町内各地区本番は五月十日頃で、一つか。ミル芽摘みをすすめている様ですが太陽の光をいっぱい受けた若々しいお茶の味もいいのではと想います。(若々と言う字は苦いに似てるね)次回号では「新茶レポート」で景気のいい話をお送りしたいです。



上記の様な時の流れに皆様にお心び方々お願いがあります。

当初、ふる里通信の購読者の皆様との相互交流も大きな目的になりました。年一回のお便りコーナーや投稿して下さった皆様の原稿はお載せ致しておりますが、もう少し太い群衆を夢見ています。例えば、都市や地区を単位にした中川根の会が出来、夏か秋に交流するとか町の方で音頭を取ってくれるとか、ふる里通信には実行する力は残念ながらありませんが、会員の皆様の名前があります。今後、中川根町出身の皆様でグループを創ろう。とお考えの方があまりましたらどうぞふる里通信を御利用下さい。皆様それをされればいい身とは存じますが、川根井とつかつての一時をすごすなんて素晴らしいと思いませんが。

昨年三月高知学芸高校の修学旅行の中国列車事故の惨事は、記憶に新しいのですが、テレビで補償交渉の難航から妥結までの様子を見て考えさせられました。百五十万円の補償金は、中国の皆さんの一家が、百年勤かなければならぬ金額だそうです。人の命は金に替えるわけにはいかなくとも、何と日本の貨幣価値の低い事でしょう。そして日本では貴重な一票を投じた入民の代表が労せず得た大金を、自分の為につかっている。子供達は少しきをつけずに消費税を差さなければならぬ。豊かな暮らしは、本物なのだろうか、と考えます。又日本人は一生懸命勤めますきて、結婚も子育ても、二の次になってしまった」との言葉を聞いた時(日本側の発言)将来が恐ろしく不安に映っています。

大井川にふたたび五つの流れがもどって来ました。下流で育った若船が力をつけてタムニーをくぐつてほしゃと願います。

大札山方面赤やーおの花が満開と聞きます。二週間おくれに白やーおの花が咲きます。自然に接するやさーい心(取らないで)と忘れないで森林浴いらっしゃつたらいいかがでしょ。山犬段のブナの木も新らしい表いで迎えてくれるでしょう。